

●新春エッセイ●

月とスツポン

年齢のせい、月日が猛スピードで過ぎてゆく。もう令和二年か。かつて正月の二日は自宅や仕事場の近くのうなぎ屋で、十人くらいの歌人が集まったものだった。

自宅では近くに住んでいた谷川健一さんや「心の花」の中西由起子さんもよく来られた。後にうなぎ屋に場所を変え、神社めぐりが始まった。

午前十時に水道橋東口に集合し、数名でタクシーに分乗して神社を幾つかめぐり、うなぎ屋一らくで遅くまで騒いだのである。

まず、神田明神へ、そして、近くの小さな嬬恋神社へ、次ぎに湯島天神へ、水道橋に戻って地元の三崎神社にも寄り、ようやくうなぎ屋に着いて乾杯したのだった。

常連は住正代、角宮悦子、福田龍生、三枝昂之、林田恒浩、加藤英彦、森本平、岸本節子、後藤恵市各氏であった。先年亡くなられた寺戸和子さんもよく見えていた。住さん、角宮さん、福田さんも他界され、

今は新年会も無く、淋しく時の移りを実感せざるをえない。

かつては正月気分というムードが誰にもあったように思うが、現在はどうかろう。そこで何人かの歌人の新年の歌を思い出してみたい。

まず啄木の作。

・何となく、／今年はいい事あるごとし。
／元日の朝、／晴れて風無し。
・腹の底より欠伸もよほし／ながながと欠伸してみぬ、／今年の元日

次は茂吉の作。

・今しいま年の来るとひむがしの八百うづ潮に茜かがよふ
・高ひかる日の母を恋ひ地の廻り極まりて
天新たなり
佐太郎の作。

・居を移し心移ればまのあたり新年来る鼎々として
・手につつむ真玉のごときものありて生く

晋樹隆彦

る一年さやかにあらなる
なぜか、玉城徹に正月の作が多いことを記憶している。

・元日のゆふべは晴れてあをあを喜びのごと海の波たつ
・正月も十日すぎたりいささかほモンテスキューを読みなどまして

玉城にしては意外に平凡な歌が、正月を詠んだ作に多いのは何故だろう。

信綱には新年の作が多いと思っていたら、案の定多かった。三首ほど引く。
・にひ年の光は匂ふ五十鈴川清き瀬浪の一つ／＼に
・金粉酒二つき三つきいささかの酔もゆるされむ新春なれば

・とだえし友古きをしへ子の真心を見るが嬉しさ年賀葉書に
こうして引いてみると啄木の作はなかなか

かだと思いが、新年の晴の作は案外に愛誦に価する作は少ないように思われる。